

第197回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第6回通信句会)開催

4月28日(水)に有志によるオンライン会議を開き、5月「通信句会」の進行スケジュールについて協議した結果、句会進行のための新たな役割分担が決まりました。「兼題の提示」は引き続き、原晶如さんをお願いしましたが、「投句のまとめ(投句一覧表作成)」は、船戸清助さんに引き受けていただき、「選句の最終まとめ(句会記録作成)」は、太田一光さんが受け持って下さいました。晶如さん、清助さん、一光さん、本当に有難うございます。どうぞよろしくお願い致します。

オンライン会議も3回目にもなりますと、発言するタイミングも判ってきて、議事進行が円滑になり、会議の形が定まってきました。今後も更にエキサイティングな句会が開かれますよう、皆さんの随所におけるご奮発ご精励を祈念申し上げます。

5月6日から21日までの第6回「通信句会」に、参加されたのは次の方々です。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の17名です。錦流さんが初参加でした。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

5月から季語は夏になりましたが、今回、晶如さんからのご提示は、兼題1が「薄暑」、兼題2が「鉄線花」、そして当季雑詠の自由題が「初夏」。陽光が一段と強くなり、街には白いシャツの人々が増えてくる「薄暑」を、家の軒先に拵えられたネットに、蔓状に葉を広げ、紫や白の大輪を開花させる「鉄線花」を、はたまた自由題の「初夏」を、句の中に如何に詠み込むのかが、5月の私たちの課題でした。

かくして、集まりました全部で51句の皆さんの努力の結晶、その中から皆さんが選句して、天賞、最多得票賞(☆印)に推挙した句は下述の通りです。ご鑑賞下さい。

兼題1. 「薄暑」

◎『海風の程良き駅の薄暑かな』 明峰 天1☆10

兼題2. 「鉄線花」

◎『紫を重ねて夜の鉄線花』 晶如 天1

◎『長男の定年となり鉄線花』 多佳 天1

◎『「じゃ、ね」と行く背に無言なり鉄線花』 白然 天1

◎『白壁に両手広げし鉄線花』 蒼樹 ☆7

当季雑詠の自由題(=初夏=)

◎『夏めきて子のピッチング速くなり』 白然 天4

◎『制服の白軽やかに初夏の風』 歌多音 天3

◎『夏きざすコップの水に水平線』 晶如 天2

◎『一人行く満ちあふれたる夏の山』 憧岳 天1

◎『いろいろな色あり”緑“初夏の頃』 創風 天1

◎『風みどり台詞合わせの二人かな』 荻女 天1

◎『家飲みのビールの宣伝ばかりなり』 和感 天1

◎『歩む先旅の始まり雲の峰』 蒼樹 ☆8

兼題1. 「薄暑」では、「薄暑」というテーマが難しかったのか、皆さんの推挙を得て天賞と、高得票の最多得票賞(☆印)を獲得したのは、明峰さんの句「海風の程良き駅の薄暑かな」の句、一句だけでした。湘南海岸沿いの電車の駅のいずれか、JR 東海道線

なら根府川、真鶴、湯河原辺りでしょうか。江ノ電なら稲村ヶ崎から七里ガ浜、鎌倉高校前辺り、京浜急行線を加えると、もっと増えるかも知れません。こんな経験があるように思います。選外では栄女さんの句「朝粥を供え薄暑の風清し」が、平素の暮らしの一瞬をキャッチし高得票を獲得しました。俳句は十七音という短い表現形式のもの、読者の位置から見れば、それぞれに多くの解釈が生まれてくるのは当然です。むしろ「解釈が沢山出来るほど良い俳句」と言われる位です。この二句も間違いなく、その例に入るものと思われれます。

兼題2。「鉄線花」では、晶如さんの句「紫を重ねて夜の鉄線花」が、天賞一つを獲得しました。紫色の、そして夜の鉄線花です。天賞推挙の言葉に「美しくも妖艶な雰囲気が漂う」とありました。夜の鉄線花に選者の共感が傾きました。次に多佳さんの句「長男の定年となり鉄線花」も、天賞一つを獲得しました。この句は「長男の定年退職」という「時の流れ」を直覚させられる句を詠まれています。夏の一時期には、必ず自分の暮らしの傍にある大輪の鉄線花です。この度の「長男の定年」も付き合ってくれた・・・ということでしょう。しみじみとした句になりました。自然の句「『じゃ、ね』と行く背に無言なり鉄線花」も、天賞一つをいただきました。詠み手は暮らしの中の別れと鉄線の無言に対して、前述の多佳さんの心境に近いものがあつたように思うのですが、選者はこの句の中にドラマを見つけて下さいました。蒼樹さんの句「白壁に両手広げし鉄線花」が最多得票賞（☆印）を獲得されました。鉄線花の大輪の中に両手を広げて受け止めてくれるものを見つけられたのでしょうか。選者も受け止めてくれた鉄線花に一票を投じました。

当季雑詠の自由題の部では、自然の句「夏めきて子のピッチング速くなり」が、天賞四つをいただきました。ウオーキング中に見かける親子の投球練習を句にしました。親父に教えられて腰のひねりで、ピッチングにスピードが出てきた子供、球筋が違ってきました。「でかしたぞ、親父」ではないでしょうか。次に歌多音さんの句「制服の白軽やかに初夏の風」が、天賞三つを獲得しました。この句を読んで一瞬、頭に鮮明に浮かんできたのは、白い制服を着た澁刺とした女子高生の姿です。そして初夏の風の爽やかさと女子高生のフットワークの軽やかさ・・・、記憶は一挙に昭和30年代へ戻りますね。懐かしいです。

次に晶如さんの句「夏きざすコップの中の水平線」が、天賞二つを獲得しました。この句の面白さは、コップの中と広い梅の水平線の対比ということでしょうか。コロナ禍で自粛中の現在、せめてコップの中の水平線に、海の水平線を思い浮かべるとは・・・。タイムリーな句と言えましょうか。次に憧岳さんの句「一人行く満ちあふれたる夏の山」が、天賞一つを獲得しました。選者は「清々しい初夏の夏山、人生の達成感、満足感が感じられる」と共感されました。次に創風さんの句「いろいろな色あり”緑”初夏の頃」が、天賞一つを獲得しました。この句は初夏の頃の「緑」に、ご自身の思い出を暗示されました。色に人生の思い出を秘めるとは・・・。選者には何ともロマンチック迫ってくるものがありました。

萩女さんの句「風みどり台詞合わせの二人かな」も、天賞一つを獲得しました。この句は、中七、下五の「台詞合わせをする二人」にありますね。選者の評に「初舞台に立たれたときの思い出」とありましたが、初舞台、台詞合わせという練習は、鼓動する胸のうちに、今も脈打たせるものがあるのではないのでしょうか。もう一句、和感さんの句「家飲みのビールの宣伝ばかりなり」が、コロナ禍という当世の風潮を見事に切り取り、天賞一つを獲得しました。まさしく現況のテレビや新聞の宣伝には、新しいビールの宣伝が突出しています。ノン・アルコールの美味しいビールとは・・・、一度飲んでみたいですね。

天賞はつきませんでした。蒼樹さんの句「歩む先旅の始まり雲の峰」が、多くの票を集め最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句の中七に託された「旅の始まり」とは、「老いの旅」でしょうか。まだまだ負けぬという「挑戦の旅」でしょうか。季語「雲の峰」

の陰しさに、これからの人生の旅を表現していると思いました。

この原稿をまとめていますと、パソコンには俳句サロン「道草」から、次の案内が来ておりました、5月26日（水）には、6月「通信句会」のためのオンライン会議が開かれるようです。「俳句は舌頭千転」と言ひまして、「詠んだ俳句は何度も何度も読み返してみろ」と、芭蕉さんが言っております。人様の優秀句も「何度も何度も読み返すべき」と思っております。さあ。心して次に備えましょう。

白然（記）